

村松賢一先生を送る

平田 悦朗

村松先生がお茶の水女子大学をはなれることになった。急なことだったが、今、こうして送る言葉を書き出してみると、ともに仕事をしたころのあれこれが思い出される。

先生をお茶の水女子大学にお迎えすることになったのは1995年4月だったと思う。

村松先生は、早速、優れた企画力と牽引力とで行動を開始された。

着任したその年の秋に、もう「お茶の水女子大学音声言語学習会」を立ち上げられた。幼稚園児から小・中・高校、大学生にいたる各段階での音声言語コミュニケーション能力の発展過程の調査研究をすすめるというもので、これには、外国人留学生も対象とされた。

その成果は、多くの報告や論文にまとめられ、関わった先生方によって、国語教育現場に反映されたのはご存知のとおりである。

その後さらに研究はすすみ、談話や読みの分析を深められた。

村松先生と私は、ともにNHKのアナウンサーであった。お互いに30年あまりを放送現場で過ごした。名古屋放送局や東京では職場をともにした時期もあった。

アナウンサーとして、いつも意識のどこかにあるのは、物事を正しく、わかりよく、効率よく話しことばで伝えるには、どのようにしたらよいか、ということだった。

村松先生も、永年のアナウンサー生活のなかでそのような問題意識を持ちながら、お茶の水女子大学に着任されたのだと思う。そして、その問題意識を突き詰められた。

丁寧な物腰のなかに独特のユーモアを漂わせるお人柄は、たくさんの学生たちに慕われた。

これからも、より広い立場で研究や教育をすすめられ、いつまでも私たちに刺激しつづけていただきたいと願っている。